不定期刊行　　第538号　2015.03.12

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
大町高等学校

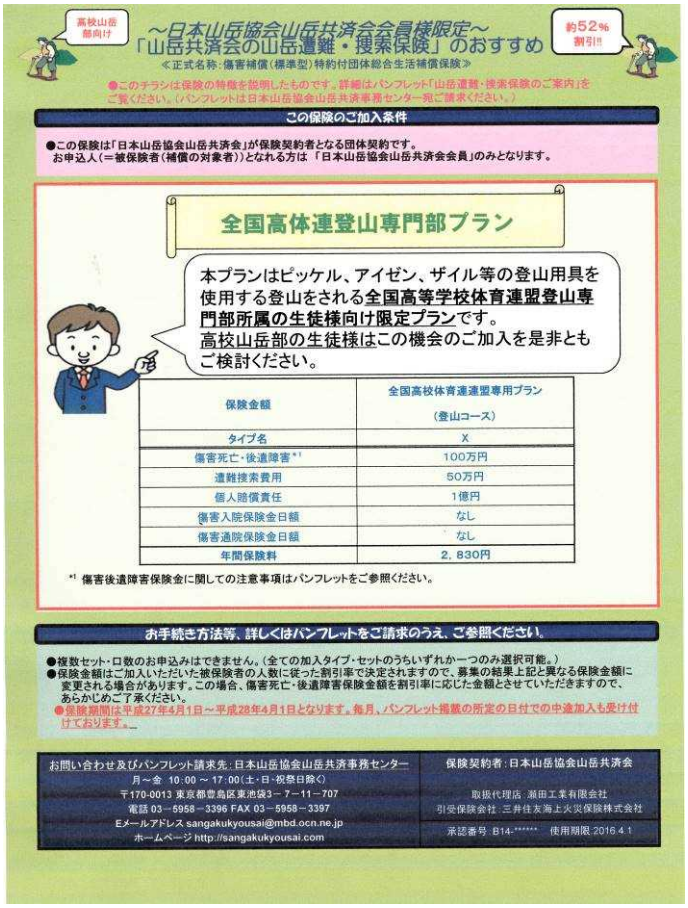
## 日山協山岳保険ハイキングコースでは不安な学校に朗報

## ピッケル・アイゼン・ロープを使う高校山岳部向けの新しい保険

かわらばん531号の編集子のひとりごとで書いた山岳共済の件のその後である。今年度から、高体連加盟の山岳部については日山協の選手登録が義務付けられるとともに、そのメリットとして、日山協の山岳共済への会費が無料になる特典がついた。そして、ハイキングレベルの保険については、高体連限定で年間保険料が1480円と格安で加入ができていた。しかし、この保険はアイゼン・ピッケル・ロープ使用の登山については保険適用外であり、このような登山を行う山岳部については、一般向けの商品の中から加入するしかなかった。たまたま、12月に行われた全国高等学校選抜クライミング大会の際に、日山協山岳共済の引き受け会社の三井住友海上火災の商品開発担当者、日山協の事務局長と一緒にお話をする機会があり、率直にお話する中で検討する旨をお約束いただけた。そして、早速ご検討いただく中で、ピッケル、アイゼン、ロープを使う高校山岳部向けの新たな山岳保険が作っていただくことができたというのがこれまでのいきさつである。本日、日山協の事務局長の尾形さんを通じ、正式にこの保険への加入が可能になったとの連絡をいただいた。

私個人としては、山岳部の生徒には従来は一般社会人向けのＳタイプ（年間保険料3970円）に加入させていた。今回の商品は、こちらに比べると遭難対策費用が50万円と半額になっている点はあるが、金額的には1000円以上安価になっており、通年で活動する山岳部においては、昨年までの高校山岳部向けの専用保険「ハイキングコース」に不安を感じていた学校においては、充分検討する価値はあると思う。

近々に全国高体連からも連絡があろうかと思うが、4月1日からの補償を希望する向きについては、**3月20日までに**申し込みと振り込みを完了することが必須条件なので、この場を使って、一足先にご紹介したい。詳しくは添付したPDFを参照いただきたい。申し込み書類は日山協山岳共済へ連絡すればすぐに送っていただける（ＨＰからのダウンロードも可能）はずだ。すでに申込書が届いている学校においては、申し込みの際に、タイプをＸとして申し込めばこの保険が適用になる旨、山岳共済会とも確認をした。



# 栂池天狗原日帰り山行　大町高校 春企画第１弾

大町高校春の第１弾は、栂池で日帰り山行を実施。月末に行う春休み合宿の前哨戦と位置付けて、生徒には「山スキー」「スノーボード」「スノーシュー」のいずれの参加でもオーケーと伝えた。結果、山スキーは顧問も含め５人、スノボが１人、スノーシュー1 名というパーティ編成となった。

今シーズンは「バックカントリースキー」という名での遭難事故が相次いで発生し、山スキーフリークには極めてビハインドな状況がある。もちろん滑りに魅力がないわけではないが、僕はやはり「スキー登山」という位置づけをまず生徒には教えたい。山スキーをやる以上、そのリスクを知り、それべしの技術と知識を知った上で山へ入るべきであること、山行の一形態としてスキーを活用するというのが僕のスタンスであることを生徒にも伝えたい。冬山に入るという心づもりなしに安易に滑りのみを追求するためにバックカントリーに足を踏み入れるべきではない。

9:15、ゴンドラを下りると鵜峰の稜線が屏風のように見える。現在地を確認し、栂の森ゲレンデへと出る。山スキー組はシールを、それ以外はスノーシューを装着して、快晴のゲレンデから林道へと踏み込む。足回りが様々なので、万が一パーティがちぎれた場合でもこのゲレンデの入口で落ちあうことを確認する。まさに春山の装いの山は、アウターを脱いでも汗ばむほど。10:15 に早稲田小屋、先行するパーティも望める。

10:25、大阪経済大学小屋脇で一本立てる。屋根の上で小屋の関係者が雪下ろしをしていたが、雪の量は例年よりかなり多い。休んでいると、大町署地域課の救助隊員０氏が仲間と登って来た。お互いに安全登山に心がけましょうと声を掛けあう。

成城小屋を過ぎると、景色は一気に開けてくる。天狗原はもうそこだ。白馬乗鞍、小蓮華から白馬三山、不帰へと続く白銀の峰々が目の前に迫って来る。11:10、天狗原の急斜面に入る手前で一息入れて、急坂へと踏み込む。雪国育ちの生徒たちは、慣れないシール登高、スノーシュー歩きにもすぐに慣れた。12:00 には天狗原に到着した。条件がよければ乗鞍までとも目論んでいたが、風も少し出てきて、小雪も舞い出した。慣れてきたとはいえ、長時間の雪上歩行は生徒にとって、我々が思っている以上に消耗もしているはずだ。行動打ち切り時刻は 12:30 と設定していたが、今日はここまでで良しとして、この広大な山上の台地の雰囲気を満喫しよう。

この広々とした平らでガスが巻いてきたらどうするか、コンパスと地図を見ながら考えさせる。しばらく、山上の至福の時間を味わった後、天狗原の祠の前で、湯を沸かし、持ち上げた蕎麦を茹でて、ゆっくりと昼食タイムとした。13:20、下山開始。先頭は松田先生にお願いし、中間に支援で入ってくれた山内氏、私がしんがりで前後をブロックしながら下りる。成城小屋まで降りたところで、最高到達点で歌い忘れた山岳部歌を歌う。それぞれつかず離れずで下ったのだが、沢を下り過ぎて登り返す羽目になった生徒が 2 名。松田さんから読図していないからだとチクリ、痛いところを突かれる。「いいトレーニングができました」とは生徒の言。スキーでの下り 10 秒が登りでは堪えることを身をもって知ったことだろう。こちらの手の内であれば、こういう経験も生徒にとっては、いい経験になる。

雪国、大町、小谷や白馬育ちの生徒たちにとっても山スキーの世界は新しい世界として刻まれたことだろう。